

## 学生とともに形づくる 授業に向けて

齋藤 敬之

南山大学外国語学部講師

筆者が所属する学科はドイツ語教育とドイツ語圏地域研究の2つを軸とするカリキュラムを編成している。筆者は、歴史学を専門としていることもあり、後者の地域研究に該当するドイツの歴史に関する科目を主に担当している。2年次以上を対象とする科目では、なるべく様々なテーマを扱いながらドイツの歴史への見方の基礎を論じている。一方、3年次以上を対象とする科目では、筆者が専門とする時代やテーマに限定し、世界史教科書での記述と昨今の研究動向の相違に着目しつつ研究上重要な概念を説明したり、当時の史料を紹介したりしている。こうした授業を担当してまず実感するのは、学生の予備知識の多寡が様々であることである。高校までのカリキュラムの変化や入試制度の多様化によって、世界史学習の経験の

ある学生とそうでない学生が混在した状況で授業を行わなければならない。だからといって、いわゆる高校レベルの知識をおさらいすることに満足するのではなく、大学という場で歴史を学ぶことの意義やその新鮮さを学生に実感させることも求められる。こうした複数の側面に向き合いながら歴史科目を担当する難しさを日々感じている。

先述した2つの科目を行う際に共通して意識しているのは、第一に授業で用いる資料を工夫することである。パワーポイントのスライドやそれに対応して作成・配布しているレジユメの中で重要な事項や概念をあえて空欄にすることで、学生に書き込みを促して授業中の説明に注意を向けてもらうようにしている。このように学生に刺激を与える試みは今後も継続していくつもりである。

スライドの素材としては、文献やインターネット上で入手できるドイツの歴史に関する絵画や写真、地図、また筆者が留学や出張の際に撮りためたドイツの街並みや建造物などの写真といった、多種多様な画像資料を用いるようにしている。これらをスライドに散りばめることはスライドの見栄えをよくするためだけのものではない。むしろ、例えばドイツの都市の旧市街やそれを囲む市壁の写

真を見せ、中世の街並みの特徴やその時代的背景を考えて意見を述べてもらうといった、画像資料そのものを扱う機会を頻繁に設けることで、歴史事象への関心や理解度を高めることを意図している。学生からも「画像資料も見せてもらうことによつて興味深く学べた」といった好意的な評価を受けており、今後も継続していきたい。

授業運営の際に意識している第二の点として、講義科目においても学生との双方向性をなるべく確保することである。現在取り組んでいるのがLMS(学習管理システム)上でのリアクションペーパーの活用である。毎回の授業後に感想や質問を書いてももらうだけでなく、「今日の問題」と称して例えば「(一般にはマルティン・ルターが95カ条の論題を発表した1517年と説明される)宗教改革はいつ始まったのか」といったような問いを考察してもらう。学生の回答を次回の授業の冒頭で共有することで主体的に授業に関わっている感覚を彼らに持つってもらうことがこの試みの第一の目的である。加えて、複数の意見を見せることで、ある歴史事象にも様々な解釈や評価の余地があるという歴史研究の一端を追体験してもらったり、問いに関連する研究動向に触れてもらったりする機会

ともしている。学生の回答を取りまとめていると、視点の鋭い興味深い回答に出会うことも少なくなき、「この意見はぜひ次回の授業で共有しよう」という教員としてのモチベーションにもなっている。

筆者自身はこれまで紹介してきた取り組みに一定の手応えを感じているが、教員の自己満足にならないようにしなければならぬ。先述したリアクションペーパーの活用は授業後に重点を置いているため、授業を一方的な講義の場としないための工夫はまだ改善の余地があると感じている。例えば、先述した空欄の穴埋めなどを授業内のクイズとして運用し、その際LMSも含めたデジタルツールを利用して明快かつ迅速に回答を共有することもできるだろう。

また、授業で研究動向も扱う以上、研究者としての研鑽も怠りたくはない。表面的な授業形態だけでなく授業内容や自身の研究の充実も図っていることを何らかの形で学生に示すことも、大学教員のあるべき姿であると考えている。

東北学院大学地域総合学部 ・ 伊鹿倉 正司 「地域総合学部長」

# 杜の都仙台に誕生した「知の杜」と「人の杜」

## はじめに

東北学院大学の歴史は、1886年に創設された「仙台神学校」から始まる。その後、仙台神学校は、1891年に「東北学院」と改称して教育機関としての基盤を整えた。こうして本学は、押川方義<sup>おしかわまさよし</sup>、W・E・ホーイ、そしてD・B・シュネーダーの3校祖によって据えられた、福音主義キリスト教の信仰に基づく建学の精神「個人の尊厳の重視と人格の完成」を堅持しつつ、今日に至るまで地域社会の発展に寄与する教育を担い続けている。

2023年4月、本学は、前述の建学の精神を踏まえ、社会連携・貢献を教育、研究に並ぶ重要な使命の一

つとして位置付け、現在わが国が抱えるさまざまな地域の課題を解決し、これからの地域を担う人材を養成するために、「地域総合学部」〈Faculty of Regional Studies=ForeSt(フォレスト・杜<sup>もり</sup>)〉を設置した。

### 1 「よりよい地域」の実現のための異なる2つのアプローチ

地域総合学部は「地域コミュニティ学科」と「政策デザイン学科」という2つの学科から構成され、それぞれ異なるアプローチで「よりよい地域」の実現に寄与できるような人材の育成に取り組んでいる。

地域コミュニティ学科は、「そこで暮らす地域住民がよりよい生活を営むには何が必要か」という問いを、学びの

基本的な土台としている。そして、その問いにアプローチするために、「社会と産業」「健康と福祉」「人と自然」という3つの専門領域から、地域コミュニティの在り方を理解し、分析し、構想する能力を身に付けることを学科のコンセプトとしている。また、これら3つの専門領域で、総合的かつ専門的な知識を学生に身に付けさせるために、大学構内の教室や実習室における知識や技法の教授に加え、フィールドワークの実践に基づき、そこで学生たちに新たな発見をもらうなど、地域での実践的な学びとを往還できるカリキュラムを提供している。

一方、政策デザイン学科では、「公―共―私の連携」を意識した教育に取り組んでいる。少子高齢化・人口減少が進む現代日本において、よりよい地域社会をつくるための営みは、行政(国や地方自治体)に任せておけばよいというものでは決していない。行政のみならず、企業・NPO法人などの事業者や地域住民の参画と連携が必要不可欠である。地域で暮らし、学び、働く私たち一人一人が、よりよい社会をつくるための「政策」の主体たること、そして他者との協働が求められているのである。この視点を基底に置き、政策デザイン学科の学びは「公共行政」「経済産

業」「市民社会」という3つの専門領域を中心に据える構成となっている。

## 2 「知の杜」と「人の杜」

地域総合学部の教員スタッフは32名(2023年12月時点)であり、その専門分野は地理学、地球科学、生態学、社会学、社会福祉学、教育学、経済学、経営学、政治学、文化人類学など多岐にわたる。まさに「知の杜」といってふさわしい学問分野の広さに、本学部の大きな特長がある。

また2023年4月には、株式会社東京商工リサーチ東北支社と連携協力協定を締結し、地域企業の訪問(インターンシップ)や地域企業とともに経営課題の解決を目指すPBL(Problem-based Learning)・課題解決型学習)、社会起業家の育成に取り組んでいる。今後も学外組織との連携関係を構築し、学生が多様な人々と結び付く「人の杜」を創出していくことで、学生たちにより広い視野と実践的な経験を提供し、彼らが社会に出てからも価値ある貢献をすることができるよう支援していく。